

吟誦のための童詩

東京女子高等師範學校附屬幼稚園 新庄 よしこ

おはなしの時に、先生が主になつて或るはなしを子どもに聞かせる、或は子供の一人が話し手となる、又ある時は、世間ばなしとでも云ふやうな四方山の話をお互ひにし合ふ、又は繪本に見いるなど、この外に、歌謡を誦くわいむと云ふ事も幼兒生活中に是非あるべきことかと思ひます。むづかしい言葉で申しますなら、詩賦と云ふ字句が最もこの心をあらはしてゐるやうに思はれます。

てんとむし

煙草のすきな ちいさんが

廣い野原の まん中で

マッチをなくして 大きはぎ

見ればさいはい 足もとの

草のはつばに 火がもえる

ちいさんあはてゝ 腰まげて

煙管きせうの雁首 もつて行きや

大事なく 火はきえて

バットとび立つ てんとむし

眞赤なく てんとむし。

例へばこの「てんとむし」と云ふうたをあつかひます時にまづ先生が一通りこれを讀んできかせます、一度ではうたつてゐる意味がわかりませんが三度か四度位面白さうによんできかせます。そ

れから、一句づゝみんな一緒に云ひます。先生が「たばこのすきな おちいさんが」と云つて、子供全體みんなに是を一緒に云はせませう、かうして一句づゝ幾度かくり返し〜して、すつかり子供が覚えこんでしまふ迄何日か、掛つて申します。この時先生はいかにも面白そうに、そのおちいさんが煙草のみたしマッチは無くしてしまつた、どこにやつたのやらとまごついてゐる様子、又草の原からてんとむしが、あの可愛いらしい子供の好きなたんとむしがとび立つ有様、かうしたうたから出るところの情景を心に浮べて、先生がそんな氣持になつてうたはせて居なければ面白くできません。無表情で棒よみにいふならば、うたふ興味を失つてしまふとか或は鸚鵡の口うつしのやうに感情なしのものになります。このうたは、簡単に云へばまあ童謡として擧げられてあるものゝ中ではどれでも宜しいでせう、けれども考へ出すとなか〜

これと云つて適當なよいものが見あたらないものでございます。

一、歌謡から出る全體のこゝろもちが子供に、すゝいわかるもの、

一、句調のよいもの

一、適當の短さ、

この外は、お話を選ぶ條件と全く同じでございます。少しばかり選びましたものをならべて見ませう。

雨

雨はどこにも降つてゐる
家にも木にも降つてゐる
こゝの傘にも降つてゐる
海の船にも降つてゐる

火事

火事だ 火事だ とおまはりさん

どこだ どこだ と一郎さん

あつちの方だ と二郎さん

行つて見よう と三郎さん

わたしも行かう と四郎さん

象

象さん、象さん、

どうしてお前は首ばかり、のべつ幕なし振つて
るの？

—それは外でもありません、別なわけでもあり
ません。

いつも考へて居りますが、どうもわかりませ
ん……

—あんな小さな人間が、まるでわたしを鼠のや
うにどうして檻に入れたのか、とんと合點が
ゆきません。

いつを大きな丸太でも曳かせてくれ、ばよい
ものと、

それでわたしは、首ばかり、のべつまくなし
振りまする。

猿と玉葱

一皮むいたが 果が出ない

二皮むいたが 果が出ない

何の木の実か知らないが

早く中味が食べたいと

むいてもむいても出るものは

やつぱり同じ皮ばかり

おかしな木の實もあるものと

玉葱片手にお猿さん

小さくびかして思ふやう

何の木の實か知らないが
 こんな厚着あつぎであるからにや
 よつほど寒い北國の
 山の土産かさもなけりや
 さむがり育ちのよはむしの
 いくぢなしかも知れないぞ。

小猫

昔小猫がありました
 毛は柔やわらかな絹のやう
 口のまはりに鬚ひげがあり
 木兔みづくに似た眼をもつた
 かはいゝ小猫がありました。
 その子は背のびが大好きで
 鼠も大變よくとつた。
 そつとお室の棚あるき
 足をなめゝ歩いてた。

けれどある時この茶目が
 何をしたかと思ひます。

机の上に一皿の

焼いた肴があつた時、

これは結構と座りこみ、

そのまゝペロリと食べました。

こゝへ母さんどんで来て、

「くらくらくら」と吐られた。

くひしんぼうの小猫さん。

けれどかはいゝ小猫さん。

汽車ごあひる

大きなおかまに 湯氣たてゝ

ガタンコッコ シュッポポ

母さんあひるは おどろいて

たいへんゝ 汽車ですよ

早くお逃げよ

あぶないよ

こどものあひるは
あつちへ逃げちや
こつちへ逃げちや

大あはて
ガアガアガア
バッタバタ

汽車が來ました
箱をつないで

汽車みちに
笛ふいて

ガッタンコッコ

シユッポッポ

あそんでゐました
母さんあひるに
母さん一人で

汽車みちで
子のあひる
子が七羽

汽車が來ました
汽車のふみきり
ガッタンコッコ
ガアガアバタ〜

ふみ切りへ
大さはぎ
シユッポッポ
ガアバタリ。

是等は世界童話大系童謡の部、或は合歡の搖籃、
コドモノクニ等から選んだものですが、ところへ
字句をなほしたり、或は原文はもつと長いもので、
よい部だけをこつたのもあります。何れも子供へ
こゝろみて見たものでございます。殊に猿と玉葱
は、誦んでゐる中に口でいふばかりでは物足りな
いと見えて、猿が皮をむいて居る手ぶり、又は首
をまげて考へてゐる様など動作にあらはしながら
いたしました。

この童詩の中どうかすると陥り易いのは感傷的
になりがちなことと、どかくかういふのが大變多う
ございますからこれは避けたいことと思ひます。
可愛いゝもの、美しいものは兎に角として、それ
よりももつと遠大な山とか川、海などの自然をう
たつたものがほしいものだとかね〜思つて居り
ますが、こゝろいふのがなかく〜得がたうございま
す。